

高等学校課題研究ハンドブック Chapter 6 d

リサーチ上級編4：フィールドワーク（続）：インタビュー＆聞き書き

それでは、Chapter 6c のフィールドワークの続きとして、フィールドでどのように取材していくか、説明しましょう。

6 d - 1. インタビューや聞き取りについて

フィールドワークで定番のインタビューやヒアリングに話を移しましょう。最近、政治家や経営者に長時間インタビューして「オーラル・ヒストリー」としてまとめる仕事も増えてきましたが、インタビューや現地調査は研究対象・情報提供者の人々と親しい関係を築き上げながら進めます。その際、取材対象の方々（インフォーマント¹）への尊敬の念とプライバシーの尊重をお願いします。とくに、インタビューでのやりとりを録音したり、写真を撮影する時には必ず同意や許可をいただきましょう。

それでは、インタビューの実例として、日本の民俗学者で全国各地を訪れ、名もない人たちとの会話から様々な事実を掘り起こしてきた宮本常一の『忘れられた日本人』から、対馬の漁村の成り立ちを語る「梶田富五郎翁」をちょっと引用します（文章は若干改編）。

郵便局で局長さんとこの村（対馬豆酸村浅藻）の話色々としているうちに、この村の開拓者がたった一人生き残っていることを教えられた。それが梶田翁であった。一つの村の成長をそのはじめからずっとみつめてきた人である。これはたいへんなことである。

翁は煙ですすけた家の板間で釣り道具をつくっていた。

「爺さんは山口県の久賀の生まれじゃそうなが、わしも久賀の東の西方の者で、う、なつかしくてたずねてきたんじゃが」と話しかけると、「へえ、西方かいのう、へえ、ようこまできんさったのう、はア、わしもひさしゅう久賀へもいんでみんな、久賀もずいぶん変んさつろうのう」

郷里の言葉をまる出しで話し出した翁に、初めから他人行儀はなかった。私が「昔のことを聞かしてもらおうと思うて」と一言いうと、「はア、わしがここ来たのも古いことじゃ」と話し出した。（略）

「巖原で問屋と契約して、その年（明治9年）から問屋が浅藻へ納屋をつくることになって、わしらの船は浅藻へ来た。いま、こがいにひらけてええ町になっているが、わしはじめて来たときア、この浦は木が立ち暗うじょってのう。（略）人も誰もおらん。ないだ（渚）ばたまで木が茂って、木の枝が海につくほどじゃった。たった一軒、浅藻と小浅藻の境の鼻の上に吹き転がすような納屋があった。その下へ平戸の者がブリの建網を入れていて、その番人の小屋じゃった。（略）

「その頃になるとわしもだいぶ物心がついてきて、久賀で菓子屋をするのもええが、身寄りも少ないんじゃし、どこで何をしてもええ身のじゃから、いっそ漁師で暮らそうと決心して、本気で釣漁をならうことにしやした。浅藻もそれからだんだん開けてきて、みんなも鋸や鎌を持っていて、木を伐ったり、土をならしたり、ちょっとは畑もひらいて野菜もつくるようにして、どうやら人の住めるようなところにしたんでこ

¹ インフォーマント（Informant）とは、フィールドリサーチで情報・データを提供していただいた方をさします。

いす。(略)

「そねえあたいを1日10枚も釣ってみなされ、たいがいじゃアええ気持ちになるで晩にゃいっぱい飲まにゃならんちう気にもなりませい。そういう時にゃア金儲けのことなど考えやアせん。ただ魚を釣るのがおもしろうて、世の中の人になぜみな漁師にならんぬのかと不思議でたまらんほどじゃった。(略)

「はア、おもしろいことも悲しいこともえっとありましたわい。しかし能も何もない人間じゃけに、おもしろいということも漁のおもしろみぐらいのもの、悲しみというても、家内に不幸のあったときくらいで、まアばアさんと50年も一緒に暮らせたのはなよりのしあわせでこした。

だいで話しましたのう。いづくしましようかい」

日がな1日、昔を知る老人の話のうかがううちに、村のなりたちも、人々の暮らしの移ろいも、その老人が送った人生も、いつのまにか、身に染み込むように伝わってくる。

フィールドリサーチは必ず“相手”がいらっしゃるわけですが、“相手”からの話を聞くうちに、自らの姿も見えてくる＝他者とのかかわりから、自らもより深く知ることができる、これがフィールドスタディの真髄です。もちろん、そのためには、事前に入念な下調べが必須です。尋ねなければならない項目をあらかじめ整理し、相手の発言がより理解できるように背景を知っておかねばなりません。

6d-2. 聞き書き

インタビューの比重がさらに大きくなると、「聞き取り調査／ヒアリング」に、さらに情報提供者（インフォーマント）の声メインになると、独白体の「語り＝聞き書き」等に移行します。この聞き書きのもっとも優れた例の一つに、アメリカのジャーナリストS・ターケルの『仕事！』²があります（ターケル、1983）。プロ野球選手から消防士まで、135人のアメリカ人が、自分がたずさわる115種の「仕事」を淡々と語るさまには圧倒されるだけです。例えば、この分厚い本の冒頭、一人の製鋼所労働者が切り出します。

おれは滅びつつある人種、肉体労働者だ。ずばり筋肉労働……あげたり、さげたり。一日4、5万ポンドの鉄鋼を扱う。(笑う)……誰かがピラミッドをたてたのさ。なにをたてるにしたって、誰かがたてるのさ。ピラミッド、エンパイヤ・ステートビル、ただなんとなくできた、というようなもんじゃない。うしろにゃ、きつい仕事があるってもんよ……壁にずらっとレンガ工、配電工から何から何まで、ひとりひとりの名前が刻まれているのを見たいもんだよ。それで、おっさんが息子を連れてきたりして「ほら、45階のあそこに、おれの名があるだろ。おれが鉄骨をいれたんだ」という。ピカソは絵を指さすことができる。おれはなにを指させるというのかね。作家は本を指させる。誰もが、指さすことができる「自分の仕事」を持つべきなんだ。

いずれにしても、ここまで完璧な聞き書きを実現するためには、事前に入念な下調べが必須です。こうして、数時間のインタビューのため、事前準備に何日も費やす努力が要求されるのです。

² 実は、高校生の皆さんにはぜひ、この『仕事！』をお読みいただき、「自分にとって仕事とは何か?」、「人生にとって仕事を持つ意味は何か?」を考えていただければと思います（それだけで、十分、リサーチのレポートのテーマです。例えば、あなたのお父さんにとっての仕事とは? インタビューしてみてもよいかもしれません）。

Box 6 d - 1. Family history を探ろう：自らの家族の来し方を調べる

インタビューの相手となると、ヒアリングに訪れた役所や NPO/NGO、企業の方などをお考えになるかもしれませんが、皆さんの祖父母あるいは曾祖父母の方に、皆さんの家の“Family history”をお尋ねになるのも興味深いかもかもしれません。ご自分の祖父母や曾祖父母の方々がどこでお生まれになり、どんな暮らしを送ってきたのか？ 意外に知らない事実を驚くことになるかもしれません。

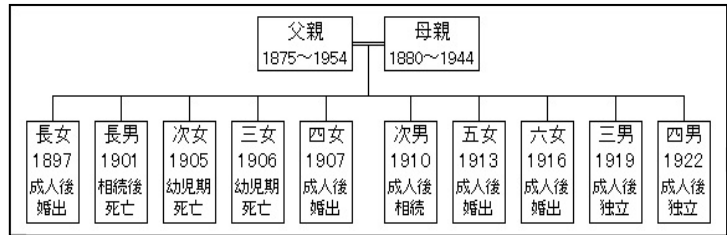


図2 明治から大正にかけての一農家の子供たち

図2は、東北のある県の西部、伝統的な米作地帯の一夫婦とその子どもたちの系図です。この図からだけでも、明治から大

正、昭和を経た近代化において、東北の一農村に住む庶民がどう暮らしてきたのか、伝わってくるものがあります。例えば、母親は1897~1922年の25年間に10回出産しています(2.78年に1回出産)。男子が4人、女子が6人、そのうち女子2人は幼児期に死亡、8人が成人まで育ちます。さらに長男は家を相続後に死亡し、次男が継ぐことになりませんが、残りの7人は(第2次世界大戦もなんとか生き残って)天寿をまっとうします。単純計算ならば、1世代(およそ20~25年)で人口が2人から7人に、3.5倍に増えたとも言えます。もっとも、田畑は増えませんが、結局は“あととり”をのぞけば、女子はすべて他家に婚出し、三男と四男は学校を卒業後、都会に出て、給与所得者になります。

これが明治から昭和にかけて、日本の近代化とともに人口が急増し、その多くは農村生活者から都市生活者に転換していく縮図です。そして、その間に様々な“Family history”が展開されてきたはず。それをインタビューで聞き取っていくことも、そしてそれらの資料を束ねて、地域の歴史を紡いでいくことも、十分に社会的貢献(Chapter 1 参照)になるかもしれません。

6 d - 3. ある村のお年寄りへのインタビュー内容案

以下は、ある高校が夏季休暇中、かつて海岸から内陸部への“塩街道(海から塩を運ぶ道筋)”にあった山村を訪問する際、生徒さんがおじいさん、おばあさんにどんなことを尋ねたらよいか、相談を受けた際に考えた内容の一部を抜粋・改編したものです。

相談を受けた時にまず調べたことは、その村の歴史やなりたちです。Webでは実にいろんな資料がありますが、その村が昔、塩街道の道筋でどんな生業(なりわい)だったか、どんな暮らしをしていたのかを調べ、その上で、お年寄りの方がご自分の人生を振り返り、喜んで答えていただけるような問いを工夫します。同時に、おじいさんやおばあさんの個人情報取り扱いにはくれぐれも気をつけて下さい。

なお、ここでのキーワードは、塩街道(昔のなりわり)、村の衰退、昔の生活(農業、作物、家畜、トチモチ³、山の暮らし、子供の遊び、言い伝え)、今の暮らし(健康、医療、災害)、住民の皆さんのライフ・ヒストリーと現在の生活等でしょうか。

■おじいさん、おばあさんの一生について

- ・お歳をうかがっても良いですか？
- ・ここで生まれになりました？(他村の場合)お嫁/お婿さんに来られたのですか？
- ・どんなお仕事をされてきましたか？
- ・今、何人家族でお暮らしか、うかがってもよいですか？ お子さんやお孫さんはご一緒ですか？

■現在の暮らしを尋ねる：季節、お祭り、農閑期、冬越しについて

- ・今は夏ですけれど、この村の冬はどんな様子ですか？(訪問している季節以外のことも考える)

³ 栃餅：トチノキの実を灰汁(あく)抜きして、餅米等と蒸して餅状にしたもの、各地の山村で重要な食物として食べられていました。現在、お土産物として販売されたりもしています。

高校生が学ぶ課題研究

とくに、昔の冬越しではどんな準備をされていきましたか？

- ・季節ごとに、どんな祭りがありますか？ 神社やお寺が中心ですか？ どのぐらいの人数ですか？
- ・農閑期などに湯治（温泉）などに行かれますか？ また、どんなところに行かれますか？

■病気になるれた時のことなど

- ・病気や身体の調子が悪い時は、どうされていますか？
- ・例えば、富山の薬売りのように、置き薬などを利用されていますか？
- ・入院しなければいけない時には、どちらの病院に行かれますか？
- ・ご病気の際には、病院に入院されるか、ご自宅で静養されるか、どちらがよいと思いますか？

■お葬式やお墓、お寺、神社

- ・お葬式はどちらであげていますか また、お墓はどうされていますか？
- ・お寺の宗派はどちらですか？
- ・この集落にはどんな神社がありますか？ どんな神様がお祭りされていますか？
- ・神様や神社、社（やしろ）について、何か言い伝えや古いお話などはありますか？

■昔を尋ねる1：昔の様子と塩の道

- ・昔の塩街道を覚えていらっしゃるでしょうか？ どのぐらいの家があったか、何人ぐらい住んでいたか、覚えていらっしゃるでしょうか？
- ・塩以外に、どんなものが運ばれていましたか？ 例えば、海からは塩干物の魚など？

■昔を尋ねる2：農業

- ・昔は、お米のほかに、ソバ、アワ、ヒエを作っていたようですが、覚えていらっしゃるでしょうか？
- ・大豆（ダイズ）はどうですか？ 昔は味噌や醤油はどうしていましたか？
- ・昔の田んぼや畑でのお仕事は大変でしたか？ また、どんなところが大変だったのですか？
- ・昔、馬や牛など飼っていた頃を覚えていらっしゃるでしょうか？ 何に使っていたのですか？ 餌などもどうしてましたか？

■昔を尋ねる3：トチモチや山菜、山の利用

- ・トチモチを作っていた頃を覚えていますか？ みんなで一緒に作るという感じでしたか？
- ・トチモチを食べるのは、お祭りなど特別の時でしたか？ ふだんの時も食べてましたか？
- ・村の周囲の森はだれの所有ですか？ 個人ですか、それともみんなで共有していますか？
- ・植林は盛んですか？ どんな木を植えますか？
- ・昔は、野山で狩りをするのはよくありましたか？ 最近はいかがですか？

■昔を尋ねる4：子供の遊び、言い伝え

- ・子供の頃、どんな遊びをしていましたか？ 川遊びや山遊びなどはいかがですか？
- ・子供の頃に聞いたお話で、一番、心に残っている話はなんですか？
- ・この地方、あるいはこの集落だけに伝わる言い伝えなどはありますか？
- ・昔の領主、例えば、武田氏や上杉氏にまつわる言い伝えはありますか？

■災害について尋ねる

- ・この村で一番怖い思いをした災害はなんですか？
- ・地滑りはよくありますか？ また、鉄砲水や洪水はどうですか？

6d-4. 引用文献・Web 情報

関西学院大学総合政策学部編『基礎演習ハンドブック改訂新版 さあ、大学の学びをはじめよう！』関西学院大学出版会、2012。

宮本常一『忘れられた日本人』岩波書店、1984。

ターケル、S『仕事！』（中山容他訳）晶文社、1983。

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部